若越郷土研究
22ノ6

鯖江市立待古墳群について
―北陸における地域研究二―

中司照世

一　はじめに

筆者はいぜん本誌上で大野の古墳時代について若干言及したことがあり、[注一]未だに後篇を出すに至っていない。既に前篇提出後一年余りを経ており、本来ならば小稿は続篇となる筈であった。しかし、昨年大野において不幸にも首長墓と考えられる前方後円墳などが削られるという事件がおき、それらの古墳は放置しておけば自然崩壊の危険があることから、緊急に調査せねばならぬ事態に至った。その発掘調査は来春に予定されており、発掘されるとなれば単に踏査による予測のみではなく、ある程度まで正確に位置づけることが可能になる。したがって続篇は調査後に果すことにしたい。

他方この間、鯖江市天神山古墳群の狐山古墳の遺物を実測し、[注二]同古墳を踏査する機会を得た。天神山古墳群については既に正式な報告書[注三]も刊行されているが、本報告書は一般の人々には入手し難いものであり、また狐山古墳などについてもあまり触れられていない。そこで今回は狐山古墳について従来の説明不足の点を若干補うとともに、当古墳を含む古墳群についての再紹介を果したいと思う。

二　天神山古墳群における四代の首長

天神山古墳群は鯖江市の北郊にあり、行政的には福井市との境界緑辺に位置し、西を越前の沖積地を貫流する日野川と、東を旧浅水川によって挟まれた丘陵上に所在している。報告によれば周辺の古墳も含めて総数一五七基の古墳が確認されており、天神山古墳群、経ヶ岳古墳群などと呼び分けられているが本来同一グループの大古墳群であり、「立待古墳群」とでも一括呼称されるべきものである。ゆえに天神山、山頂経ヶ岳、春慶寺山の各群はこの立待古墳群の支群に過ぎないものである。

さて、天神山古墳群（支群）は立待古墳群の西端丘陵上に位置し、他の山頂、経ヶ岳、春慶寺山の各支群が標高のより高い丘陵上にありほとんど円墳か方墳で構成されているのに対し、最も低い丘陵ながら四基の明確な前方後円墳が確認されている。すなわち狐山古墳、万丈古墳、高島古墳、中坂古墳であり、立待古墳群を形成した「立待地域集団」の首長墓は天神山古墳群に集中しているわけである。これはある特定丘陵が首長系列墓域として占定され、残余の丘陵に他の集団構成員が墓域を設定したものであり、当地域集団においても階層的差異に基づいた墓域の設定が行なわれたことを示している。福井市の足羽山古墳群内における足羽山支群[注四]と八幡山、兎越山両支群、松岡町域を中心とする松岡古墳群内における松岡支群[注五]と原目山、重立山両支群などの

関係も同様な階層的差異に依拠した占地を顕現したものに他ならない。

図1は天神山古墳群の分布図であるが、筆者が踏査し得たのはごく一部分に過ぎないため、大半は同報告書の掲載分布図によった。まず丘陵南端の天神山から説明するならば、この部分には「空堀特殊遺構」と呼称された遺構(注六)があり、現在も二重あるいは三重に堀をめぐらした跡が良く残っている。(図1のA)報告書では城砦跡説が否定されているがごく典型的な砦跡であり、何の根拠で特殊遺構とされたのか理解し難い。次に狐山古墳はこの天神山砦跡から最初の高所に位置し、丘陵の稜線を掘割って造られたもので、前後にその痕跡をみとめることができる。ただ陪塚らしいものは確認できなかった。また高島古墳も狐山古墳と同様に自然地形を利用して削り出しているが、高さは特に雄大であり狐山古墳を凌いでいる。この、後円部上には矩形の盗掘穴があり、副葬品の遺存が疑われる状況である。

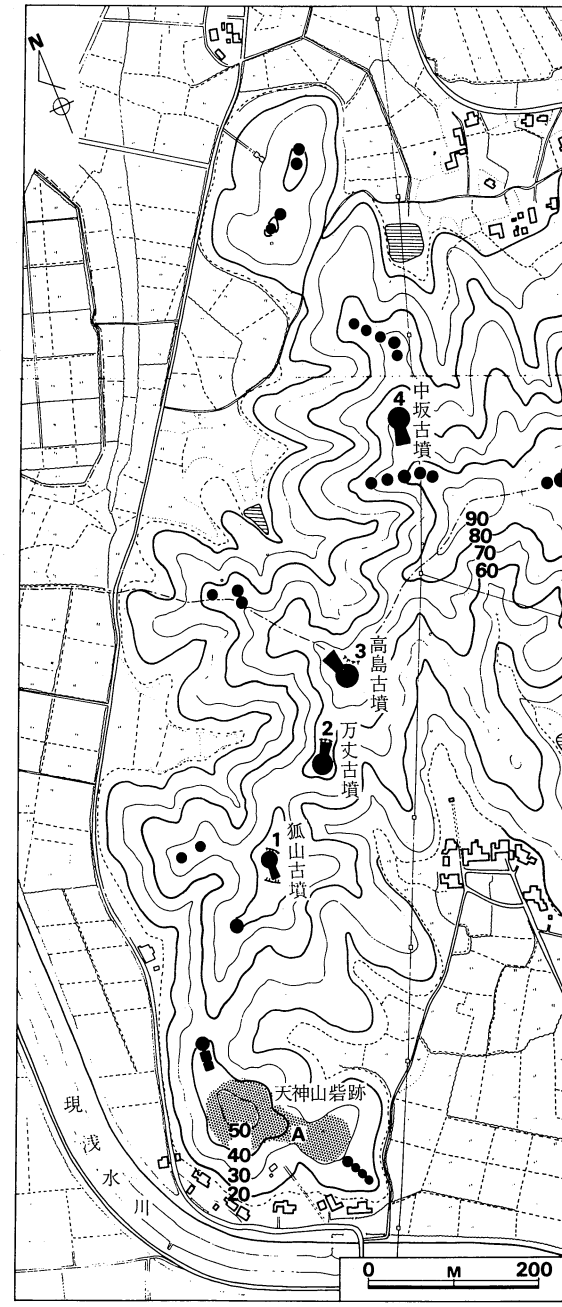

図1　天神山古墳群分布図

ところで筆者は立待古墳群全体の様相を充分に把握し得ている訳ではない。しかし、越前における古墳の占地は基本的には丘陵先端部から奥へと変化しており、このような観点から四基の前方後円墳の築造順序を想定することが可能である。それは狐山古墳→万丈古墳→高島古墳→中坂古墳である。また別な方法でこの四基の築造順序を想定することもできる。幸いなことに四基のうち三基の墳丘測量図が作成されているのである。ただ惜しいことに二基の測図には墳丘裾線が加筆されていないため、具体的な平面プランの変化を辿ることは困難である。しかし、各々の墳丘の断面図によって前方部が次第に発達していることが窺え、先に占地から推測した四基の前方後円墳の変遷があながち誤っていないことを傍証するに充分と言えよう。

なお、越前において山稜線上に位置する古墳は若干の例外を除いて四、五世紀代に限定できることが今日までの調査で判明している。ゆえに当然のことながら前述の四基もこの二〇〇年間に含まれるものであろう。

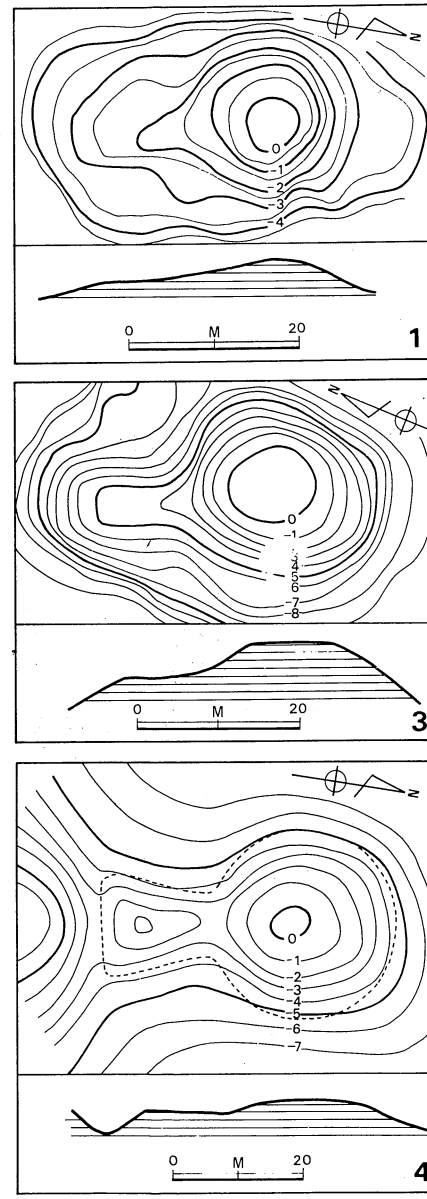

図2　前方後円墳々丘実測図
（1　狐山古墳
3　高島古墳
4　中坂古墳
注三文献図を一部改変）

三　狐山古墳の検討

立待古墳群内で発掘調査された前方後円墳は狐山古墳のみである。当墳の調査結果としては、概略次のことが報告されている。

『墳丘の主軸はほぼ方位に従って営まれ全長三一・三米、後円部径一九・四米、高さ三・三米、墳頂平坦面径約六米で、前方部は西側の封土が流れており、長さ

約一二米、巾約八米、高さ約一米のものである。

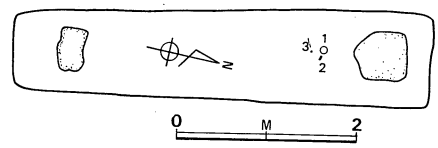

図3　狐山古墳主体部実測図
（注三文献より）

内部構造は墳頂から一・一米のところに小さな礫をまじえた厚さ五糎乃至一〇糎くらいの黄褐色の粘土が敷かれていた。巾は北部で一米、南部で八五糎、長さ四・六米で、平面（筆者注、床面）はほぼ水平であった。その両端には黄褐色の粘土の塊りがあり、北部の粘土巾は五五糎、長さ五〇糎、南部の粘土巾は四五糎、長さ四〇糎くらいであった。南北の間隔は三・二米余り、頭部の内法巾約四五糎である。

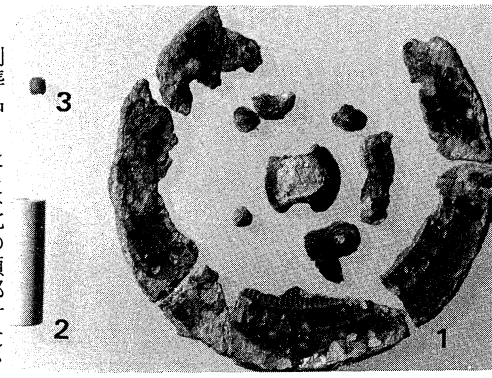

図4　狐山古墳出土遺物遺

副葬品としては北の頭部付近から仿製鏡一面（変形四獣鏡）と碧玉製管玉一個と青色ガラス小玉一個が検出されたに過ぎない。その他墳頂下二〇糎で主体部の真上から土師器片が検出された。』

以上の報告によって、内部主体は内法長三・二米の箱形木棺であり、粘土を敷いた上に墳丘主軸にそって置かれ、両小口板の外側にも粘土塊が充塡されたことがわかる。

次に出土した副葬品を紹介する。変形四獣鏡は復元径八・四糎、縁厚三・二粍、復元鈕高七粍であり、鏡背面に朱が付着していることから棺内に施朱が行なわれたことが窺える。管玉は灰色を呈し、光沢をもったもので、最大長二・七〇糎、最大径七・

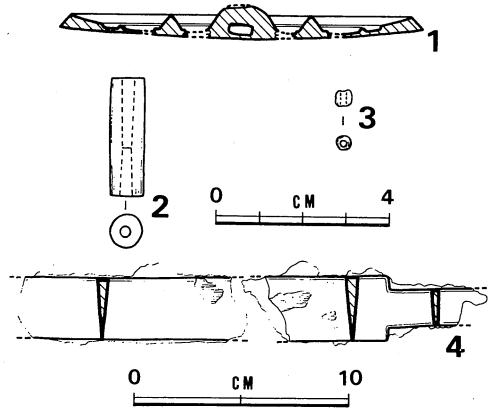

図5　狐山古墳(1～3),経ヶ岳山頂墳(4)
出土遺物実測図

八粍、重さ三瓦で、言うまでもなく両側穿孔である。ガラス小玉は緑色がかった青色で、切り口は丸くなっていない。最大長三・七八粍、最大径三・五粍、重さ一〇〇瓩以下である。

首長墓というのもおこがましい程度の貧弱な副葬品量であるが、当地ではごく平均的な副葬品の構成である。またこのように僅少な副葬品から築造時期を限定するのもやや困難であるが、一応四世紀末ないし五世紀初頭に比定しておく。

四　立待地域の首長

以上の狐山古墳の検討から他の三基の首長墓にも若干の年代的な限定が可能になる。仮に前記四墳が歴代首長墓であり、各墳に一世代ごとの時期的な間隔を想定することが許されるならば、

1　狐山古墳（全長三一・三米）四世紀末ないし五世紀初頭
←
2　万丈古墳（全長三四米）五世紀前葉
←
3　高島古墳（全長四三米）五世紀中葉
←
4　中坂古墳（全長四五米）五世紀後葉

となろう。またこれ以上の詳細な年代は今後の調査によって確定されるべき課題である。

ところで、筆者は先々稿において、松岡・丸岡町内に存在する全長一〇〇米近い大型墳はその規模が三〇～五〇米クラスの各地域首長墓の上に立つ広域首長（大首長）の墓であろうことを指摘した。[注八] 右に記したごとく立待地域の四代の首長墓の比定時期に大過ないとすれば、狐山古墳は松岡古墳群の手繰城山古墳[注九]（全長一二八・四米）に、万丈古墳は丸岡古墳群の六呂瀬山古墳（全長約一五〇米）に、高島古墳は松岡古墳群の泰遠寺山古墳[注一〇]（全長約一〇〇米）に各々ほぼ併行することとなる。

それではこの立待地域の首長も松岡・丸岡から輩出した歴代の広域首長に属したものであろうか。越前の北陸道域の地形は福井平野と南越盆地に分かれており、立待地域は当然後者に含まれるものである。加えて南越盆地には斉藤優氏によって発見された経ヶ塚古墳[注一一]（全長七三米）や青木豊昭氏によって発見された今北山古墳[注一二]（全長約七五米）などの大型墳があり、両墳は五世紀中葉まで降らないものである。ゆえに立待地域の一、二代目の首長は、基本的には南越盆地内の広域首長に属していたものと考えるべきであろう。

さらに付言するならば、南越盆地の広域首長と福井平野の広域首長が同じような勢力をもったものと考えることは困難である。なぜならほぼ同一時期と考えられる今北山古墳と六呂瀬山古墳を比較すれば明らかな如く、後者の墳丘規模は前者のほぼ二倍である。いずれにしろ、越前において併立していた二つの広域首長相互の関係については、今後南越盆地での分布を含めた調査精度が高まれば解決の糸口が把める問題である。やたらと発掘することよりも、まず精度の高い分布調査と各墳の墳丘測量が実施されることこそ当面必要な課題なのである。

五　立待古墳群の破壊に関連して

図5の4は経ヶ岳古墳群の山頂に所在す

る円墳から一九七三年に採集した刀の断片である。今二片になっているが本来同一個体と考えられ、平棟平造で刃幅三糎、棟厚六・八粍の両関をもつものである。また刀身には木質が付着している。

本墳も近年とみに有名になった盗掘常習者によって掘り荒されたものであり、この他にも立待古墳群は軒並み乱掘されるなど、被害を被った古墳はおびただしい数にのぼる。この違法者の行跡は当古墳群のみに留まらず、隣接する麻生津地域で先に調査された安保山一、二号墳(注一三)や鉾ヶ崎山上など数基の前方後円墳をはじめ、西は西大井古墳群(注一四)から東は酒生古墳群(注一五)まで及んでいる。これだけ膨大な数の古墳が盗掘されるということは大阪・一須賀古墳群の例をまつまでもなく当県でも大事件である。しかし、このような大問題の追求がいつのまにかウヤムヤになっているのも不可解なことである。

反面この事件の責任の一端が考古学関係者にあることも事実であろう。一般の人々への遺跡の周知徹底や正しい知識の普及などの対応がなされなかったことが、育ったかもしれぬ若い芽の育成を妨げ、一面では膨大な数の盗掘を助けることにもなったと考えられるからである。北陸で最も豊かな遺跡数を抱えながら最も研究者数が少く、研究も遅れているのは他ならぬ当県である。かつて〝鯖江市では最も代表的な古墳群〟と言われた立待古墳群、今壊滅寸前である

（福井市開発町七三―一五―二）

〔付記〕

小稿中においては既報告の成果を修正している部分も多いが逐一指摘しなかった。本来ならば先学諸氏の説を紹介し、批判すべきであるが、それを省略したのは小稿がより正確な資料を提供するとともに、考古学の紹介を意図しているからでもある。

注

一、拙稿　「大野盆地の古墳時代（前篇）」若越郷土研究　第二一巻第三号　昭和五一年

二、実測にあたっては鯖江市史編纂室竹内信夫氏のご配慮を得た。

三、斉藤優他　「天神山古墳群」　鯖江市教育委員会　昭和四八年

四、斉藤優　「足羽山の古墳」　福井県郷土誌懇談会　昭和三五年

五、斉藤優　「松岡古墳群」　文化財調査報告第八集　昭和三三年

六、注三文献に同じ。

七、ノギスは五〇分の一粍までのものを使用した。以下の計測値も同じ。

八、拙稿　「六呂瀬山古墳とその陪塚」　若越郷土研究　第二〇巻第六号　昭和五〇年
筆者は本稿中において当墳の営造時期については明記していない。しかし文意からも明白なごとく手繰城山古墳（四世紀末ないし五世紀初頭）の一世代後を想定しており、よって当然のことながら五世紀前葉と考えていた訳である。誤解されている向きもあるので銘記しておく。

九、福井大学考古学研究会　「松岡三号墳（手繰城山古墳）の調査」　松岡町教育委員会　昭和五〇年

一〇、注五文献に同じ。

一一、斉藤優　「朝日山古墳群」　文化財調査報告　第二一集　昭和四六年

一二、福井県教育委員会　「安保山古墳群」　福井県埋蔵文化財調査報告　第一集　昭和五一年

一三、注一二文献に同じ。

一四、山本昭治　「西大井古墳群」　鯖江市教育

委員会　昭和四八年
一五、福井大学考古学研究会　「福井市酒生地域における埋蔵文化財分布調査報告」　昭和四九年